

「情報教育」「教育の情報化」推進の中で培う子どもの学力

笠岡市立中央小学校 高橋 伸明

URL <http://hi-bridge.net>

mailto:nob@hi-bridge.net

1 はじめに

2002年8月28日、文部科学省より「ITで築く確かな学力～その実現と定着のための視点と方策～」という答申が出されました。第一章「確かな学力とIT」の項目は以下のようになっています。

- 1 基礎・基本の確実な習得
- 2 子ども一人一人の力の伸長
- 3 学ぶ楽しさの実感と自ら学ぶ意欲の向上
- 4 思考力、判断力、表現力の育成
- 5 学び方、問題解決能力の育成
- 6 創意工夫を生かした質の高い授業づくり

7 障害のある子どもの障害に基づく種々の困難の改善・克服と、社会とのコミュニケーションの拡大
今日は皆様方御自身が「ITを活用して子どもたちにこんな学力を育てよう！」という気持ちを抱いてお帰りいただけるように、また「私だって日々こんな工夫をしていますよ！」ということをご紹介いただけるように、そのきっかけ作りの発表をさせていただきます。間違えても「漢字や計算のドリル学習を行うコンピュータソフトの紹介」ではございません。そういうものが不要だとは申しませんが、昨今ちまたで論じられている「基礎学力重視論」の中には、明らかに「読み・書き・そろばん」を中心に据えた偏ったものもあります。学力とは、例えば上記答申で示されているような幅広い範ちゅうの中で考え、論じられるべきものだと考えます。

「ITのよさ」を生かして「確かな学力」を築くことの重要性やコツについて、皆様と一っしょに考えさせていただける場となることを願っています。

2 「情報教育」と「教育の情報化」

(1) 私がこの区別にこだわる理由

今から6年前、「情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査協力者会議」により最終答申が出されました(1997.10)。その中で「情報化に対応した教育」については、1)情報教育 2)学習指導における情報手段の活用 3)校務の情報化 の3つに分けて説明されています。つまり、「情報教育」は「教育の情報化」推進における一つの内容であり、2つの言葉は同意語ではないということです。しかし私自身が、これらの意味を深く理解できたのは、その2年後でした。もしかして、今もまだ皆様のまわりには明確に区別してとらえておられない方がいらっしゃるのではないかと危惧しています。

そんな硬い話はどうでもよいと思われるかも知れませんが、私は「ITで築く確かな学力」を語る時、このことは曖昧にしておくべきではないと思っています。それは、例えば「この授業でITを活用する目的は何か？」ということと深くかかわる問題だからです。

(2) 情報教育やIT活用の推進に対する根強い“誤解”

いまだに「情報教育とはコンピュータを使うことが前提にされている。」とっておられる方がいると、どこかの研修会で聞いたことがあります。私は「コンピュータを使わない情報教育もある。」ことを自信をもって皆さんにお伝えしますし、そういう実践もたくさんしてきています。

(情報教育の目標は「コンピュータが使えるようになること」ではなく「情報活用能力の育成」にあるからです。)またかつて、ある先生から「学習のまとめにホームページを作らせた。理由は、子どもたちがホームページ作りに興味を抱いているから。」というお話を聞き、ガッカリしたこともありました。確かに、子どもがやりたいと思うことをやらせるのは、興味・関心を大切にしているという意味では必要な留意点です。しかし、「学習のねらい」を達成するための「IT活用の意図」は、何なのでしょう？子どもが使いたいと思うからコンピュータを使わせるのではなく、コンピュータを使うことによって育つ資質・能力があるから、コンピュータを使わせるのではないのでしょうか？もちろんそれは、間違えても「キーボードやマウスの使い方技能向上」などという次元の話ではなく、各教科等のねらいに基づいた資質・能力の育成という意図であるべきですが。(当たり前のことですが、例えば各教科の授業で「教育の情報化」を進める最たるねらいは、教科のねらいが達成されることにあります。)

コンピュータ等のIT活用を時代のトレンドと感じ、「使えるようにならないと...」「乗り遅れないために...」という気持ちだけで学習に導入すると、教育としては本末転倒が生じる...。私は常日頃からそう思っています。「慣れるために使わせよう」ではなく、「こういう力を育てたいから使わせよう」という視点が見失われないIT活用。日々模索・試行錯誤の連続です。

3 情報教育・教育の情報化を進める中で育てる子どもの学力

(1) 「2005年の教室環境で学力をつける」 教育の情報化の“目玉”

「2005年の教室」という言葉がブランド化すらしている昨今、その環境実現に向けた行政サイドからの予算措置は思うように進まないものの、いろいろな場で関連した研修会・実践例紹介が盛んに行われています(「2005年の教室」とは、校内LAN・インターネットにつながる回線が引かれ、コンピュータ2台+プロジェクタ等の大型画面による投影環境が整っている教室のことです。念のため。)実は私の勤務する笠岡市立中央小学校でも明後日(8月24日)「ネットデイ」が開催されます。これで2学期からは本格的な「2005年の教室環境」になるので、「今までできなかったこともできるようになる！」と大いに楽しみにしているところです。

私自身は「疑似2005年の教室環境」を取り入れて3年目になります。大型画面+コンピュータよりも、むしろよく使うのは大型画面+教材提示装置です。教科書・資料集の一部が、いとも簡単に提示資料となり、「分かる授業」にはとても効果的なツールです。昨年度末から「マグネットスクリーン(黒板に貼り付けて使うスクリーン。ペンで画面内に記入することもできる。)」も入手し、活用しています。例えば、ワークシートをマグネットスクリーンへ投影し、()の部分に解答を記入しながら学習内容の整理をしていく、などという使い方もでき、全員で共通理解しながら情報を共有する作業には最適です。

その他にも効果的な活用方法は数々あると思いますが、この「2005年の教室環境で育てる子どもの学力」の大部分は「教科のねらい・教科で育てる学力」そのものだと考えます。ですから、前述したような「情報教育の目標を達成する」こととは一線を画して考えなければなりません(ここでは、あえて情報活用能力育成のための実践については省きます。)。ITを効果的に活用して教科のねらいを達成する学習について、多くの先生方で考え提案し合って、子どもの学力向上に寄与できればよいと考えています。

(2) デジタルコンテンツを活用した授業

「2005年の教室」で有効に利用されるべく、その開発・活用研究が盛んに行われているものの一つにデジタルコンテンツがあります。デジタルコンテンツの機能・役割の整理には、例えば次ページの表のようなものがあります。どんなにお金をかけて作られた立派なデジタルコンテンツでも、しょせんは「間接情報」です。デジタルコンテンツ活用は、実物にさわったり実際に体験をしたりする学習活動に勝るものではありません。大切なことは、教師がそのことを理解し、そ

表 デジタルコンテンツの機能・役割
 <「デジタルコンテンツを活用した授業」,
 石黒正美(富山・長岡小)ほか(2002)より引用>

訓練	: 繰り返し
モデルの提示	: 演示, 正確な動き
思考を促す	: 良くない方法, 失敗例
	: 体験を想起する
	: 比べる
体験を補う	: 考え直す
	: 見ることができない
望ましい体験の誘発	: 体験できない : 観察の視点の明確化

のデジタルコンテンツ活用は何を求めているかということを確認した授業を組み立てることだと考えます。

デジタルコンテンツは、「2005年の教室」において全員の前で提示し活用する道具としての印象が一般には強いようです。各教科で「分かる授業」を構想する際、デジタルコンテンツを一斉に視聴する効果は容易にイメージできますし、実際に最も使いやすい場面だと考えます。しかし私は(と言っても私だけではありませんが)、一人一人がコンピュータの前に座りデジタルコンテ

ンツを使って調べる活動も、効果的な活用方法として重視しています。

例えば社会科などは、フィールドワークでもしない限り、「間接情報・間接体験」を元に子どもたちが思考・判断・表現をすることの多い教科です。動画クリップを、コンピュータで静止させたり巻き戻したりゆっくり動かしたりして視聴し、「動画クリップそのものを調べる」ことによって、教科のねらいが十分に達成される場面を構成することができます。

デジタルコンテンツを活用した授業の可能性は、今後ますます広がっていくものと考えられます。先生方お一人お一人が実践しその効果を感じられたら、一般に広め利用推進に寄与していただくことが大切なのではないかと思います。

(3) 次世代へシフトしつつある・シフトしなければならない「情報教育」

3(1)(2)に書かせていただいたことは、どちらかと言うと「教育の情報化を推進することによって各教科の学力育成に効果をもたらしましょう」という内容でしたが、この項では「情報教育によって培う学力」について触れさせていただきます。

小学校では総合的な学習の時間を中心に、もはや情報教育を行っていない学校はなくなったと思います。調べたことを情報手段を活用しながらまとめ、相手に分かりやすく伝えるというスタイルの実践は、情報教育の目標の中の「情報活用の実践力」を育てる場となっています。

数年前まで、小学校段階ではこの「情報活用の実践力」を中心に育成し、「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」に関する学習は中学校以降の段階で中心的に取り扱うことが一般的、とされてきました。しかし近年、この考え方は変容を余儀なくされています。それは、「情報活用の実践力」を身に付けながら様々な活動を行っている子どもたちにとって、「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」にかかわる学習が必然性をもってきたからです。

私は21世紀を生きるための重要な学力の一つに「メディア・リテラシー」を挙げます。新「情報教育に関する手引」(文部科学省)にも、メディア・リテラシーについて以下のように記載されています。(以下抜粋)

...メディアリテラシーの概念とは、メディアの特性を理解し、それを目的に適合的に選択し、活用する能力であり、メディアから発信される情報内容について、批判的に吟味し、理解し、評価し、主体的能動的に選択できる能力を示すものということができる。今後も技術革新によって、急速にメディアは変容する可能性がある。そこで、そうした急激な変容に耐え得るような個人の主体的な判断力の醸成の意義は、ますます強調され共有されなければならない。

メディア・リテラシーを育成する教育と言っても多種多様であり、統一的な教材が示されてい

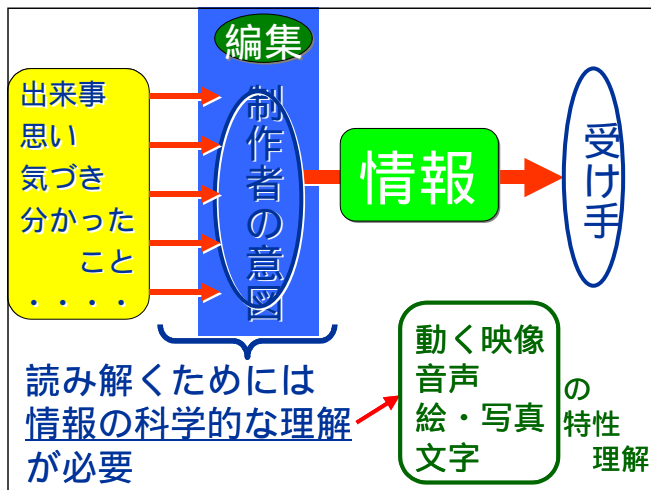


図 情報と情報伝達の構成（高橋）

ない現状においては、人それぞれイメージするものは異なります。しかし、現在は決して広く認識されているとは言えませんが、小学生に育てなければならないメディア・リテラシーにかかわる資質・能力も当然あります。私は、小学生にこそメディアが伝える情報の特性を的確に教え、それらを分析的に受け止める力や、自分たちが情報発信する際にその特性を効果的に活用する力を身に付けさせることは必須だと考えています。情報社会を形成する一員として、しかも小学生でさえ簡単にマスメディア情報を発信できる時代になった現代において、「子どもだから知らなくていい・できなく

ていい」という保護的な見方をすることは、結果的に子どもたちを情報社会の中で迷走させることにつながりかねないと感じるからです。

そして忘れてならないのは、そもそも我々大人が「メディア・リテラシー教育」を体系的に受けた経験をもっていないという事実です。教師も、子どもと共に自身のメディア・リテラシーを培いながら、情報社会に翻弄されない生き方を具現化していく必要があります。

4 おわりに ～子どもたちを情報社会のよき一員に育てるために必要な学力を～

ここまで述べてきたことのくり返しになりますが、冒頭で記した答申をはじめ文部科学省等の進める様々な政策にかかわって、今「教育の情報化」という言葉の傘下で推進されているものの“トレンド”は「ITを活用した確かな学力保障」です。2005年の教室環境の中で行われるべき授業のスタイル、情報機器、デジタルコンテンツ、…。子どもたちが目を輝かせて取り組む「ITを活用した授業」がいつでもどこでもだれでも行えるというのは、とても有意義な話です。しかし思い違いをしてはいけないのは、こうした取り組みの多くは前述したように教科のねらいを達成するためのものであり、情報教育の事例が紹介されているケースは少ないということです。情報教育は子どもたちに「道具」の使い方を教える・慣れさせるための教育ではありません。今一度お願いしたいのは、「情報教育」と「教育の情報化を生かした教育」との違いをはっきりと認識していただき、学校・地域でそれぞれの普及・推進に寄与していただければということです。そのことが「ITを効果的に活用して確かな学力を育てる」ことに間違いなく結びつくものと、私は確信しています。

最後に、私が情報教育の実践・研究を進めるときに、いつも“軸足”にしている考え方を端的に示した文を引用し、しめくくらせていただきます。

「折しも、情報教育の重要性が叫ばれ、情報教育を実施していない学校は皆無になった。

次のステップは、情報手段の学習から情報の内容と構成の学習へと移行することである。」

堀田龍也(2001):「新しい時代の基礎基本としてのメディア・リテラシー」

子どもの学力読本, 教育開発研究所, pp 43-46 より